

## テモテへの手紙第二1章「苦しみに値する福音」

### 1A テモテへの挨拶と祈り 1-5

1B キリストにあるいのちの約束 1-2

2B テモテにある偽りのない信仰 3-5

### 2A 福音にある苦しみ 6-18

1B 召しにある賜物 6-11

1C 力の御霊 6-8

2C 恵みのご計画 9-11

3C かの日まで守られる方 12-14

2B 離れて行く働き人 15-18

## 本文

テモテへの手紙第二 1 章を開いてください。この手紙は、正直、涙なしには読めません。パウロが、ローマ皇帝によって斬首刑に処せられるのを目前としている中で、書いている手紙だからです。しかも、自分が開拓し、福音が大いに広まったエベソでは、違った教えをする者たちが影響力を持ち、自分のそばにいたアジア出身の働き人までが、牢屋に入っているパウロを見捨てています。その中で、愛する信仰の我が子テモテに、彼自身も恐れや落胆の中にいるのですが、励ましの手紙を書いているのです。パウロは気落ちをしていません。敗北とは全く反対に、勝利の中でこの手紙を書いています。苦しみの中にも、それでも信じる価値のある福音、これをこの手紙で学んでいきたいと思います。

私たちは、パウロが獄中から手紙を書いたと言われている手紙をいくつか学びました。エベソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙です。それから、ピレモンへの手紙も獄中から書いたと言われています。けれども、テモテへの第二の手紙は、これと違います。テモテ第二は、パウロが二回目に投獄されて、死刑を待っているのです。

この背景は大きな出来事なので、じっくり説明します。パウロが初めてローマで囚人となったのは、彼が福音を伝えていて、異邦人にも福音を伝えていたということがあります。使徒の働きで、エルサレムで、イエス様が自分に異邦人に福音を伝えなさいという言葉ユダヤ人たちに伝えたら、ユダヤ人たちが騒ぎ出したというのが、その始まりです。彼はローマの千人隊長に保護されて、カイサリアで総督の前で弁明をして、彼自身が皇帝に上訴して、それでローマに連れて行かれました。そして、その囚人としての様子は、使徒の働きの最後に書かれています。彼は自費で借りた家に住んでいて、いわば軟禁状態です。鎖にはつながれていましたが、訪ねてくる人々には、制限はありませんでした。

その後のことについては、聖書には書かれていませんが、パウロは釈放されました。彼は、スペインなどにも宣教に行ったと思います。次第にローマ全体の状況が変わってきます。皇帝ネロが、狂気の沙汰に陥りました。紀元 64 年に、ローマに大火事が起こりました。これは、ネロ自身が火をつけたと疑われています。ローマの都市再開発のために、敢えて放火したということです。しかし、自分に向けられた嫌疑を晴らすために、キリスト者をローマ放火の罪で起訴して、迫害を始めたと言われています。ペテロの手紙、第一と第二も、この迫害が背後にあると言われています。

皇帝は、神とも主ともあがめられていましたが、カイサルは主であるとキリスト者は告白するのを拒んでいました。それから、皇帝の像に香をたくのも拒んでいました。それで、ローマに忠誠を誓う者たちからは、毛嫌いされていました。その中でネロが、キリスト者を犯人に仕立て上げました。パウロは、その指導者でありますから、真っ先に捕えられたのだと思います。そして、その牢屋は、かつて貯水槽に使われたところで、今もその遺跡がローマに残っています。かつては死体を投げ込むようなところであり、そして、穴から食べ物を吊るされてくる、暗く、冷たく、閉鎖的な所でした。

都ローマから始まった迫害なので、まだアジア、すなわち今のトルコのほうは、それほど迫害が激しくなかったのではないかと思います。しかし、アジアはアジアで大きな問題がありました。外からの迫害ではなく、内からの問題です。違った教えをする者が、影響力を持ち始めたのです。第一の手紙でパウロがテモテに、そういった者たちの議論を避けなさいと命じていましたが、ますますその攻撃は激しくなっていたように思われます。そして、パウロが牢屋に入れられたことをきっかけにして、なんとアジア出身の福音の働き手が、パウロを見捨ててしまったのです。ですから、パウロは西方ローマでは、外からの迫害に耐え、東方アジアでは内からの攻撃を受けていました。

その中で、非常に苦しんでいたのがテモテでした。彼は、以前よりもさらに、自分の働きを続けるのに怖気づいていたのだと思います。それで彼を鼓舞しています。こんなことが、第二の手紙の背景です。私たちも、福音を伝えようとしている時に苦しみを受けるでしょう。福音の中で生きて行こうとすると、苦しみを受けます。しかし、苦しみがあっても、福音には価値があるとみなしていくかが、この手紙で問われていることではないかと思います。

### 1A テモテへの挨拶と祈り 1-5

#### 1B キリストにあるいのちの約束 1-2

<sup>1</sup> 神のみこころにより、またキリスト・イエスにあるいのちの約束にしたがって、キリスト・イエスの使徒となったパウロから、<sup>2</sup> 愛する子テモテへ。父なる神と、私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。

パウロは、第一の手紙の時と同じように、テモテに対して、「愛する子」と言っています。信仰において、テモテには特別な関係を持っていました。第二の手紙では、さらにテモテを聖書によって育

てた母と祖母の名前が出てきます。

それから、挨拶に、恵みと平安だけでなく、「あわれみ」が入っています。牧会の働きをする時に、何が必要か？それは、神の憐れみです。憐れむ者は幸いである、その人は憐れみを受ける、と、イエス様は約束してくださいました。相手に憐れみを示すことも必要ですし、自分自身が神の憐れみを必要としています。

イスラエルの指導者であるネヘミヤは、「私の神よ。どうか私を覚えて、いつくしんでください。(13:31)」という言葉をもって、その書をしめくくっています。なぜなら、祭司までもが異邦人と、しかも敵対している有力者と宴席関係になっていたからです。だから厳しい対応を取らなければいけなかったのですが、神の憐れみが必要だったのです。

そして、ここの挨拶で特徴的なのは、「いのちの約束にしたがって」使徒となった、と言っているところです。なぜ、そう言っているのか？それは、自分自身が間もなく死に至るからです。主ご自身が、その使命のゆえ死なれたけれども、よみがえられたように、この方に望み抱いている者も、死んでも生きる約束が与えられています。

## 2B テモテにある偽りのない信仰 3-5

<sup>3</sup> 私は夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こし、先祖がしてきたように、私もきよい良心をもって仕えている神に感謝しています。

パウロの手紙を読むたびに、彼の祈りの生活に驚きます。彼は、ほぼすべての手紙に、その教会のために、いつも感謝して、祈っていることを書いています。牧会的な心が与えられると、一人一人のことを思い起こさざるを得ないでしょう。その心を神の前に差し出すのです。

そして、「先祖がしてきたように、私もきよい良心をもって仕えている神」という表現をしています。ここの先祖とは、イスラエルの先祖のことです。テモテの母と祖母はユダヤ人です。そのユダヤ人たちの先祖の信仰を継承していることを伝えています。パウロが、総督フェリクスの前で弁明している時に、「使徒 24:14 私たちの先祖の神に仕えています。私は、律法にかなうことと、預言者たちの書に書かれていることを、すべて信じています。」と弁明しました。

パウロの良心には、自分が決して新しい教えを伝えているのではなく、あくまでも先祖たちが仕えている神に、自分も仕えている結果、福音を宣べ伝えているのだという確信がありました。主イエスご自身が、ご自身に反対するユダヤ人たちに対して、「ヨハ 5:45 わたしが、父の前にあなたがたを訴えると思っはなりません。あなたがたを訴えるのは、あなたがたが望みを置いているモーセです。」と言われました。イスラエル人たちが神に仕えている、その連続で、パウロが福音に

仕えているのであり、別の教えを説いているのではありません。

しかし、不信者のユダヤ人たちは、別の教え、異端であるとして糾弾していました。そして、違った教えを唱える者たちが、そうした糾弾に迎合して、パウロの説く福音は不十分であると批判したのです。ガラテヤ書によると、そういった異なる教えをする人たちは、結局は、迫害を受けたくないからだと言っています。

<sup>4</sup> 私はあなたの涙を覚えているので、あなたに会って喜びに満たされたいと切望しています。

テモテは、信仰の父として仰いでいたパウロと、離れ離れにならなければいけなかったので、涙を流していたのでしょう。そのことを、パウロははっきりと覚えていました。それで会いたいと切望しています。この手紙の最後には、具体的に急いでローマに訪問するようにしなさいとテモテに語りかけている内容になっています。

<sup>5</sup> 私はあなたのうちにある、偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています。

「偽りのない信仰」と言っています。パウロの周りにいた多くの人々には、何か他の動機があったり、野心があったりして、それでパウロが苦しみの中に入れられると、自分がそこにいるのは不利になると考えて、離れていきました。しかし、テモテはそのような計算を働かせることはできませんでした。信仰に偽りがなかったからです。

そして、どのようにして偽りがなかったかといいますと、祖母から、また母から幼い時から聖書によって教えられていたことでした。使徒 16 章によると、ルステラ出身です。パウロとバルナバがルステラを訪れて福音を第一次宣教旅行に行きましたが、第二次宣教旅行の時にテモテがその宣教旅行に同行しました。テモテは、母がユダヤ人で父がギリシア人の両親を持っていました。当時は、父がユダヤ人の時のみ子がユダヤ人なので、テモテは異邦人でした。けれども、ユダヤ人にも福音を伝えるので、パウロは同行させる際に彼に割礼を受けさせました。そして父は信者にはなっていなかったのでしょう。しかし、祖母と母が、テモテが幼いころから聖書を教えていました。

この、純粋な信仰が聖書によって養われていることについて、3章でパウロが語ります。テモテにとっては、自分自身のことなので、DNA のように埋め込まれていて、自分自身は気づかないほどです。他の人々があまりにも表面的に、聖書の知識と呼ばれているものを求めている中で、彼は、そういったものからぶれずに、信仰を保っていることができたのです。

キリスト者の家庭、しかも聖書をしっかり幼い時から教えている家庭に育つ恵みについては、計り知れないものがあると思います。チャック・スミスも、幼い時に英語のアルファベットを、聖書から教わるほど、みことばに親しんでいました。そこでその信仰に、偽りのない誠実なもの、ぶれないものがあつたのです。

## **2A 福音にある苦しみ 6-18**

### **1B 召しにある賜物 6-11**

#### **1C 力の御霊 6-8**

<sup>6</sup> そういうわけで、私はあなたに思い起こしてほしいのです。私の按手によってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。

パウロの、この言葉を見ると、テモテに押しかかる心理的圧迫は相当なものだったことが伺えます。というのは、第一の手紙では、パウロは、「あなたのうちにある神の賜物を軽んじてはいけません。」と言っているからです(4:14)。軽んじるな、聖書の朗読と勧めと教えにひたすら励みなさい、と命じていました。けれども、ここでは、思い起こしてほしい、賜物を再び燃え立たせてください、と言っています。彼は、自分に与えられた、みことばを宣べ伝え、教える賜物を用いないようになってきていたのです。

次の節に出てきますが、慎み深いことと、臆病になることは全く異なります。自分がみことばを教え、戒めてきたけれども、大きな反対に遭っています。いろんな議論を吹っかけられています。それで、自分は教えることはふさわしくないと感じます。それで、その働きから身を引くようになってしまっています。こうやって、自分が身を慎みさえすれば、反対は起こらないのではないか？と思うのです。これは、恐れに心が捕らえられてしまったからであって、慎み深さとは違います。

神の賜物について知らないといけないのは、それは神の恵みによる賜物なのだということです。自分が受けるにふさわしいから与えられた力ではないのです。自分には受けるにふさわしくないので、神が祝福しておられて、御霊を注がれました。そして賜物が与えられています。ですから、いつも、自分は神の恵みによって、今、ここに立っているのだという、神に対する畏敬を抱きながら立っているのです。キリスト者として生きることそのものが、神の恵みによります。ああだ、こうだと言われて、主に与えられている賜物を用いるのをやめてしまっているのです。

しかし、用いないのは、主のみこころではありません。預言者エレミヤのことを思い出してください。彼が主の言葉を語ると、激しい反対にあいました。それで、彼は告白します。「20:9 私が、『主のことばは宣べ伝えない。もう御名によっては語らない』と思っても、主のことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。」エレミヤもテモテと同じようになっていましたが、このようにして賜物を燃え立た

せることができました。

<sup>7</sup> 神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました。

テモテは、臆病になっていました。あるいは、臆病な性格だったのでしょうか。パウロのような大胆さとは真逆の性格だったのかもしれませんが。第一の手紙でも、長老たちの罪に対処しなければいけない時に、パウロから、水ばかり飲まないで、少量のぶどう酒を使いなさいと勧められたほどです。胃の病気がしばしばありました。神経的なものではなかったのか？と思います。

恐れというのは、私たちを委縮してしまいます。特に、福音の働きをしている時は大きな敵です。本当に、とても小さなことでも、心にある恐れとの戦いがあります。例えば、金曜日のバイブルカフェで、かつて、駅前で、ものすごい怒っているおじさんがいました。そして警察を呼んできます。警察の人が私に許可を取っているか、尋ねてきます。その時は事なきを得ましたが、それ以降、心の中に、またそうした人がやってくるんじゃないかと、結構、びくびくしていました。本当に、ちょっとしたことでも臆病になってしまうものです。

しかし、恐れは信仰と相いれませんが、「ヘブル 10:38-39 「わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」そして福音を語る時に、証しを立てる時に、恐れとの戦いをしなければいけないことを、イエス様ご自身が弟子たちに教えておられました。「ルカ 12:4-7 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。」

御霊の働きと賜物について、このことを知るのはとても大事です。聖霊の賜物を用いる集会として、カルバリーチャペルではアフタグロー(Afterglow)と呼ぶものを持っていますが、その時は、恐れとは正反対の動きをしなければいけないからです。聖霊の主権に従って、聖霊がなされるままにそのまま動く必要があるからです。通常の礼拝の時は、ある程度、順番が決まっています。それに従えばよいというものがあります。司会や賛美リーダーの導きに従えばよいというものがあります。けれども、アフターグローでは、御霊のみこころのままに賜物を与え、用いるように導かれるのに従順になるのです。ですから、例えば、だれも語っていないのに、立ち上がって示されたことを語らないといけません。いつもは話しかけないような人に、聖霊に示されて、手を置いて祈ることもあります。普段は、告白していない罪を、信頼する兄弟に、また姉妹に打ち明けることもあります。聖

霊のバプテスマを信仰をもって待ち望みます。そこには、臆病や恐れは禁物です。

そして、聖霊の賜物は、「力」の賜物であることを、パウロは強調しています。そもそも、神の福音というのは、その本質が理解する知識ではなく、人を救う神の力なのです。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」神を理解しようとする人は多いのですが、神を自分が体験して、知ろうとする人は少ないです。理解できなくとも、神を知ることができるのです。ビリー・グラハムが日本に来た時に、信じることについて次のように教えました。彼は、パーキンソン症候を患っていました。けれども、片手を前方に出したのです。その手は震えていません。もし薬を飲んでいなければ、震えがとまらないのだそうです。けれども、薬でその症状が出ていません。その薬がどのように体で作用して、震えを止まらせているか、自分は理解していないと言いました。けれども、薬を飲めば震えが止まることは知っています。だから、薬を飲むのですが、それが信仰だということです。神を理解しなくとも、信仰によって神を知ることができます。その力を体験するのです。

そして福音宣教について、パウロは御霊の力と現れを強調しています。「I コリ 2:4-5 そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。それは、あなたがたの信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだったのです。」ですから、御霊は力の霊です。

そして、力に裏打ちされた愛が、御霊の愛です。イエス様が十字架で示された愛は、ユダヤ人指導者になすがままにされ、翻弄されたのではなく、初めから終わりまですべて掌握されていました。主は、総督ピラトさえ恐れさせ、彼はその恐れの中で十字架刑に処せられました。一瞬にして、彼らを滅ぼすことのおできになる方が、敢えてその十字架に自ら留まられたところに、神の愛が現れました。御霊に満たされると、力の中で愛を行います。

愛というのも、恐れと正反対です。「I ヨハ 4:18 愛には恐れはありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」恐れは、自己中心であり、プライドの裏返しです。人に何かする時に、「自分がどう思われるか？」が気になっています。人に何かされる時に、「その人から悪く言われたくない。」と行って行っています。恐れは、自分というものが碎かれたくないという高慢から来ています。しかし愛は違います。自分が何と言われようと、「相手にとって、このことは益になるかどうか？」で、自分を差し置いて相手のことを思いやります。ですから、誤解されることがありますし、不快に思われることも時にあります。けれども、その人のことを思えば行うんですね。

そして、「慎み」の霊です。先ほども話しましたが、臆病というのと慎み深さは違います。御霊の賜物は、神の恵みの中で用いるものです。神に仕えるに値しない者が、神が立たせておられるの

です。へりくだり、恐れおののいて、神に仕えます。しかし、慎みによって、自分が確かに神の恵みによってここに立っている、ということをおぼしめます。そして、自分が恵みによって召されているところに留まり、それ以上のことをするように召されていないのだとうことをわきまえることです。「ロマ 12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」

<sup>8</sup> ですからあなたは、私たちの主を証しすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをともしてください。

主を証しすることは、自分が脆いこと、弱いことを前提にして証ししています。神の恵みによって今の自分がいることを証しするのですから、自分がどうしようもない罪人であることを知って、イエス様を証しします。ゆえに、恥との葛藤がいつも付きまといます。そして、パウロは、福音のゆえに今、囚人になっています。パウロは、ローマが自分を牢に入れていとみなさず、主がお許しにならなうて、福音のゆえに囚人にならなうていとみなしていました。しかし、囚人にならなうていから、普通に考えたら恥づかしいことです。そこで、恥から避けるために福音を語らなうて、または、福音とは違らなうてた教えをして、迫害が来なうてないようにするとう誘惑が多くならなうてります。それで、違らなうてた教えを語る者たちの力が強まらなうてります。しかし、恥に屈してはいけなうてないと、パウロは励ましているのです。

パウロと福音のために苦しみを共にしてほしいと、テモテに願っています。「ヘブル 13:3 牢につながらなうている人々を、自分も牢にいらなうてる気持ちで思いやりなさい。また、自分も肉体をもちあなうているのですから、虐げらなうている人々を思いやりなさい。」牢屋に入れらなうてられることはなうてなくとも、福音のゆえ、信仰のゆえに、葛藤している人々たちと私たちはその葛藤を共にします。そうした中にならなうている人々のために祈り、時には助けをします。そうではなうてなく、世の流れに迎合して普通に暮らしたほうがあなうてるのです。福音さえ伝えなうてなければ、また信仰さえ抱いていなうてなければ、証しをしていなうてなければ、何の問題もなく、事が進むのです。けれど、その道を選ばず共に苦しむのです。モーセがそうでした。彼はファラオの養子として、何一つ不自由しなうてないはずでした。「ヘブル 11:26 彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えらなうてれる報いから目を離さなうてなかったからでした。」

## 2C 恵みのご計画 9-11

<sup>9a</sup> 神は私たちを救い、また、聖なる招きをもちあなうてて召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自分の計画と恵みによるものでした。

パウロは、気落ちして、怯えているテモテに対して、主にある誇りを取り戻させようとしています。まず、神が彼らを救ってくださいました。自分たちは罪人だたけれども、神が罪から救ってください

り、神の子どもとしてくださったのです。そして、神の子どもとして、神の国を相続するように定めてくださったのです。キリストと共に王なのです。大いなる恵みです。

そして、彼らを召してくださいました。これは福音の働きに召してくださったということです。それが、「聖なる招き」だということに目を留めてください。パウロは牢獄に入れられていますが、これは汚らしいものとは程遠く、聖なる招きなのです。神のために選り別たれて、神の救いのお働きの協力者になっているのです。

進藤さんが、数多くの犯罪人や死刑囚をキリストに導いています。一般の雑誌にそのことが記事に載っています。その記者の方と会ったことがあります。進藤さんはいつも、「聖なる下心」と説明するそうです。彼らを助けて、更生させてあげたいという情熱は本物です。けれども、そこには彼らがキリストを知って救われてほしいという、強い願いがあります。布教のため、信者を増やすためにやっているのか？と、一般の人々からは非難されるかもしれません。けれども、それでも構わないということです。聖なる下心です。

そして、これは、パウロやテモテの働きではなく、「ご自分の計画と恵み」なのだということです。神の恵みに捕えられて、動かされている時に、自分自身が何かをしているのではなく、神のご計画がそのまま成っていくのです。「ロマ 9:16 ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」自分たちが何かをしようとしても、主はそれを無視されます。アブラハムが、自分の子孫から国民が出るという約束が与えられ、それで女奴隷ハガルによってイシュマエルを生んだけれども、それは神に認められませんでした。神がただ、イサクをサラから与えられました。同じように、私たちの働き、福音の働きは、ただ神のなされたいことがなっていくことなのです。そこに、私たちは置かれていて、動かされているのです。

<sup>9b</sup> この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられ、<sup>10</sup> 今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音によっていのちと不滅を明らかに示されたのです。

神の恵みが恵みであることを知るのには、このご計画がいつから始まったかを知ることによって深められます。実に私たちが救われ、福音の働きに召されたのは、永遠の昔に、キリスト・イエスにおいてなのだということです。エペソ人への手紙の冒頭でも、「すなわち神は世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。」とあります(1:4)。

そして、神が定められた時に、そのご計画に従ってキリストが現れてくださいました。肉を取って来られたのです。そして、午前礼拝で説明しましたように、この方が、ご自身の死とよみがえりによ

って、罪の力をもぎとられました。そして、罪から来る死を滅ぼされました。そして、福音によって、朽ちることのないいのち、永遠のいのちの希望をくださったのです。

<sup>11</sup> この福音のために、私は宣教者、使徒、また教師として任命されました。

パウロは、自分が三つの働きに召されていることを述べています。宣教者は、福音を宣べ伝える者です。使徒は、キリストの権威が授けられて、諸教会を整える働きです。そして、教師は、キリストについての教えを説き明かす者です。

このようにして、パウロは、囚人となっても、主にある恵みと、務めを忘れることはありませんでした。テモテにも、この務めをしっかり保っていてほしいと願っています。私たちは、キリスト者としての歩みをしている中で、なんで、こんなことをやっているのか？と思うことがあります。自分があまりにも無力なように見えるのです。敗北しているように見えるのです。そのような時に、福音こそが人々を救う神の力なのだということを思い出す必要があります。福音にこそ、人々を変え、世界を変える力と知恵があるのだと知ることです。イエス・キリストは、文字通り世界を変え、今も変え続けています。けれども、この方がなされたのは、非常に小さいガリラヤ地方での、わずか三年ぐらいの働きであります。福音は、知者には愚かな者、力ある者には弱いものに見えますが、召された者には、神の力であり知恵なのです。

### 3C かの日まで守られる方 12-14

<sup>12</sup> そのために、私はこのような苦しみにあっています。しかし、それを恥とは思っていません。なぜなら、私は自分が信じてきた方をよく知っており、また、その方は私がお任せしたものを、かの日までも守ることがおできになると確信しているからです。

パウロが、苦しみにあっても恥と思っていない理由を明かしています。それは、「私は自分が信じてきた方をよく知っており」ということです。主イエスを、彼はよく知っているということです。これまで、主が自分が苦しんでいる時に、そばにいて励ましてくださいました。コリントで、強い反対を受けていた時に、イエス様が夜に現れました。「使 18:9b-10 恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」このように、自分ではなく、主ご自身によって今の自分がいるのです。

ですから、かの日、つまり、主が戻って来られる日、神の国が到来する日には、自分の任せたものを守ってくださると確信しています。自分の任せたものというのは、自分自身の命のことでしょう。主が、神の国においては復活させてくださることを知っています。それから、福音の働きも任せているのではないのでしょうか。エペソの長老たちに、こう言っていました。「使 20:32 今私は、あなた

がたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」

<sup>13</sup> あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。

今、パウロは、テモテに対して、自分が主から任されているものを、彼もしっかり守ってほしいということです。信仰の継承、福音の働きの継承です。

「手本にしなさい」と言っていますが、そのまま倣っていきなさい、ということです。これは、とても挑戦を受ける言葉です。自分の教えていることを見せていかないといけません。この教えは、一体どういうものなのかを自分の生活のあり方で見せていかないといけません。そしてそれを受け取った人が今度は次の世代に教えていきます。

そしてここで大事なのは、「キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに」ということです。教条的に、その教えを守っていけばよいものではありません。現実の生活の中で、目に見えなくともそれでも信じるという信仰、生きた神学が必要なのです。事実、こうやって私たちが学んでいることが、生きて信仰の中で働いていくのかどうかを見ていく必要があります。それから、「愛」が必要ですね。信じて生きていく時には、必ず愛という動機が働いていかないといけません。

<sup>14</sup> 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。

今、テモテは反対者に囲まれています。彼らは、テモテに委ねられたものが、何か悪いものであるかのようにみなします。信仰によって自分の守っているものが、まるで良くないものであるかのように中傷します。しかし、これらは良いものなのです。パウロは確認しているのですね。

そしてパウロは強調しています。「私たちのうちに宿る聖霊によって」と言っています。自分自身ではそれを守ることはできないのです、聖霊の助けによって初めて守ることができます。だから、いつも聖霊の力を受ける必要があります。

## 2B 離れて行く働き人 15-18

<sup>15</sup> あなたが知っているとおり、アジアにいる人たちはみな、私から離れて行きました。その中にはフィゲロとヘルモゲネがいます。

先ほどから話しているように、アジアから来ていた人々はパウロから離れています。迫害がローマで激しいのを見て、まだアジアでは対岸の火事と思っていたのかもしれませんが。パウロの苦しみ

を他人事にしていたのかもしれませんが。彼と同類の者だと思われたら、自分たちに火の粉が飛んでくると思ったのかもしれませんが。そして、エペソでは違った教えをする者たち、反対者たちがいます。彼らは、パウロの苦境を最大限利用して、彼の評判を下げていたことでしょう。そういったことで、パウロといっしょにいることを避けたのかもしれませんが。

そして、パウロは敢えて二人の具体的な名を取り上げています。これは、指導者から指導者に、具体的な対処が必要になるので、あえて名指しているのだと思います。そして、聖書には、悪を行った者たちが、敢えてその名が取り上げられることがあります。イスラエルの荒野の旅で、コラの反乱に加わった者たちもそうですし、名前を特定しています。そうやって、人々が警戒すべき罪をはっきりさせ、神を恐れるようにするためです。

<sup>16</sup> オネシポロの家族を主があわれんでくださるように。彼はたびたび私を元気づけ、私が鎖につながれていることを恥と思わず、<sup>17</sup> ローマに着いたとき、熱心に私を捜して見つけ出してくれました。

オネシポロは、福音のゆえにパウロの苦しみを共にすることを恥としなかった模範です。おそらく、エペソの指導者の一人だったのではないかと思います。パウロを熱心に探していたら、自分自身が捕まえられる可能性さえあったかと思えます。それも省みずに捜しました。

だから、「オネシポロの家族を主があわれんでくださるように。」と言っています。彼の勇氣ある行動によって、家族全体に危害が加わる可能性があります。主が憐れんでくださって、そのようなことが起こらないように、ということでしょう。

<sup>18</sup> かの日には主が、ご自分のあわれみをオネシポロに示してくださいますように。エペソで彼がどれほど多くの奉仕をしてくれたかは、あなた自身が一番よく知っています。

オネシポロが行ったことは、おそらくは生きているうちは報われないと、パウロは思ったのだと思います。けれども、主は憐れみを必ずオネシポロに示して下さり、エペソでの多くの奉仕も合わせて、主が報いてくださると言っています。良い行い、その労苦がそのまま無駄になることは決してない、ということです。

このようにして、いろいろな苦しみがある中でも、福音とその働きを恥としないということです。それだけ福音が自分にとって第一のものとなっているかどうか？であります。世におけるいろいろな思い煩いがあると、どうしても、他のことをしたほうが得するのでは？という誘惑を受けます。しかし、恥としないでくださいという願いをパウロはしています。しっかり、委ねられたものを、聖霊によって守るのです。